

私の個性は火竜だ！

波ぽん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

うああああああああああああああ

ノリで描きましたすみません！

← 注意書き ←

- ・ 女体化
- ・ 他のFAIRYTAILキャラ出ない
- ・ 恋愛は多分無い
- ・ 自己満足

目次

新しい世界	1
雄英かあ…	4



先程まで愉快に笑っていた顔は消え失せ、真剣な顔になった。

「君には君が生きていた世界とは別の世界に転生させる。」

「はあ…でも、私で良いのでしょうか？他に人はいると思うんですけど」

自分がそう答えると、神様はバツが悪そうに顔を歪めてゆつくり話し出す。

「実はのお……………君が死んだのは、儂のせいだな…」

「……………はあ!？」

なんてこつたい。つまりその…この神様のせいで私はFAIRY TAILの新刊も見れずに死んだということか!？コノヤロウ！

……………まあもう死んでしまったししようがないか…

「代わりに君の好きな人物の姿、好きな性別にしてあげよう」

マジですか？と心の中で聞くと、脳内にマジじゃと言う返事が帰ってきた。こいつ直接脳内（殴

喜びを心にしまい、直ぐに答える。

「じゃあ、FAIRYTAILのナツ・ドラグニルで性別は前世の女性のままでお願いします。」

「承知した」

神が手を合わせブツブツと何かを唱えると、視界が眩しい光に包まれた。

「おめでとうございます！元気な女の子ですよ！」

突然耳元で大きな声がして、目を開く。多分赤ん坊になったのだろう。吃驚して産声をあげてしまった。赤ん坊なのだから仕方ないが記憶がある私にとっては屈辱的だ。

看護師の手から離れると今度は桜色の髪の女性…多分私のお母さんが泣きながら私を抱く。

次の瞬間、近くの扉がバンツと開き、くせっ毛の強い黒髪の男性…お父さんが「産まれたか!!」と大声を出してお母さんと私に駆け寄ってくる。

「ええ…産まれましたよ。イグニールさん…」

「おお…!!ジューラにてとても可愛い!将来美女になるぞ!」

お父さんが微笑みながら私の頬を撫でる。

懐かしく感じるなあ…前世はさほど愛されなかったから…暖かく感じるよ…

そして私は幸せを感じながら眠りこけた。

雄英かあ…

3歳の時、ふとつけられていたテレビを見てみるとヒーローニュースというものがやっていた。

一瞬バラエティーかと思ったが、そう言えばお母さん達も個性というものを持っていることを思い出した。

確か個性は超能力みたいなものだから…私の個性は火竜かな…早く、火を食べてみたいという好奇心に置かれながら日々を過ごした。

数日後…

やっと個性が発動し、数日も経たないある日

ジ「ほら、ナツ！此処が貴方の通う幼稚園よ〜」

ベ「わあ〜凄〜い！」

凄いと言ったがぶつちやけると前世で通った幼稚園がでかくなった感じの見た目だから内心驚いてない。

暫くすると、先生と思われる人が中から出てきた。

お母さんは先生に挨拶をして私を先生に預け、何処かに走っていった。

あの方向は事務所…仕事か

そう思いながら、先生と一緒に園内に入っていく…

どんな個性の子が居るんだろう…楽しみだなあ…

先「はい！みんな〜今日は新しい友達が来たわよ！」

私は現在、教室の外で待っている。

他の園児の愉快的な声や先生の高い声が聞こえる。

先「では入ってきて〜」

先生に言われるまま教室へ入る。視線が凄い感じる。

まあ桜色の髪って珍しいもんな…

先「自己紹介をおねがいね」

『ナツ・ドラグニルです!!よろしくお願ひします!』

前世の私なら「えっキモ」と言われるくらい明るい声で名前を言う。

自己紹介を終え、先生に指定された席に着く。  
隣の子は緑髪の男の子。

『よろしくね！えっと……………』

緑「ぼ……………僕は緑谷出久…よ……………ろしく」

コミュ障かなあ……………

吃りながら私に返事を返す。

この子の個性は、一体どんなのだろう…多分植物かな？

先生の話を耳に入れながら微笑んだ。

「ねえねえ！ナツちゃんの個性ってなあに？」

『あたしの個性は……………火竜だよ！』

「どんなの？」

『えつとねえ…』

昼休みとなり、クラスの園児達が私に集まってくる。

前記の通り個性を聞かれ、試しに拳に炎を纏わせた。

「凄おい!!!」

先「わあ…凄いい個性ねナツちゃん！」

『あとね…火も食べられるよ！』

試しに、端っこの方で爆発してた子の炎を食べてみせる。

ちなみにその子は酷く驚いてた…当たり前前だけど…

「すごおおい！ドラゴンみたいだね！」

『えへへえ』

まあこんな感じで平凡な毎日が過ぎていき…

数年後

先「ドラグニル、お前雄英行きな」

『マジすか？』

先「マジ」

担任に呼び出され、突然こう言われた。

ちよいと待て…私の平凡が消えるだろ！

いや…これはナツとしてなりきるチャンスかもしれない！



そう思うと、ぽんぽんと欲が出てきて決意が固まる。

『……決めた……』

先「ん？なんだった？」

『あたし……雄英行くよ！先生！』

そう伝え、スキップしながら下校した。